会　議　録

会　　議　　名	令和４年度第３回小金井市立はけの森美術館運営協議会		
事　　務　　局	市民部　コミュニティ文化課（はけの森美術館）		
開　催　日　時	令和４年１１月２４日（水）１８時３０分～２０時２０分		
開　催　場　所	市立はけの森美術館　多目的講義室		
出　席　委　員	鉄矢悦朗会長 山村仁志委員 原田隆司委員 河田京子委員 坂井文枝委員 加藤治紀委員		
欠　席　委　員			
事　務　局　員	コミュニティ文化課文化推進係　　佐原、津端 同　　はけの森美術館学芸員　中村、河上、西尾 同　　はけの森美術館学芸顧問　河合		
傍　聴　の　可　否	可		
傍聴不可・一部不可の場合は、その理由		傍聴者数	０人
会　議　次　第	（１）展覧会「小山敬三展―浅間より出でその頂に至る―」の観覧 （２）委嘱状の交付 （３）委員自己紹介 （４）事務局紹介 （５）正副会長互選 （６）運営協議会の運営等について （７）事業報告等 （８）意見交換 （９）その他		
会　議　結　果	別紙のとおり		
会　議　要　旨	別紙のとおり		
提　出　資　料			

【鉄矢会長】　　皆様、こんばんは。本日は御多忙の中お集まりいただき、誠にありがとうございます。ただいまより令和４年度第３回小金井市はけの森美術館運営協議会を開会いたします。

次第１の展覧会の観覧につきましては、皆様、御覧いただいたということでよろしいでしょうか。それでは、本日の配付資料の確認を事務局のほうでお願いいたします。

【事務局】　　事務局です。本日、次第、前回の議事録を置いております。ほかに、資料１、ホチキス留めです。資料２がペラ１枚であります。アンケートの集計結果、また、関連事業の写真を資料で置かせていただいております。それぞれ展覧会の図録を２冊置いてございます。不足のある方はいらっしゃいますでしょうか。大丈夫ですか。

それでは、資料の確認は以上になります。よろしくお願いします。

【鉄矢会長】　　ありがとうございます。

それでは、次第２、事業実施報告等について、まずは開催中の展覧会の内容を事務局から説明お願いします。

【西尾学芸員】　　４ページを先に開いていただければと思います。現在開催中の丸山晩霞展ですけれども、現在の来館者数はこちらに記載のとおりとなっております。秋の時期で、ほかの場所でのイベント等も立て続いた結果かと思うのですが、少し今、来館者数が伸び悩んではいます。今後、ギャラリートークですとか、作品をお借りした丸山晩霞記念館の館長さんをお呼びしてのトークイベント等も予定しておりますので、そちらでの集客を期待したいと思っているところです。

今後のイベントとしましては、今申し上げました丸山晩霞記念館の館長によるトークイベントをこちらの会場でスライドを用いて行うというものが一つと、その前日になるんですけれども、２番、近代日本の山岳映画上映会を行う予定となっております。こちらは、晩霞が直接この映画とは関係はしていませんが、晩霞が山を登った時代に、同じように山岳に登りながら撮影された記録映画を国立映画アーカイブさんのほうからお借りしまして、それを２本上映するという予定となっています。私のスライドトークを含めて大体１時間程度のイベントを予定しています。

先日、１１月１９日に１回目のギャラリートークを終えまして、こちらの参加者が大体１５名程度だったんですけれども、次のギャラリートークをあさって２６日の１４時から予定しております。

今回お手元にお配りしたパンフレット、展覧会図録と、あともう一つ、丸山晩霞記念館

から購入した『水彩の明星』という目録を販売しておりまして、それから、丸山晩霞記念館から同じく購入した絵はがきを販売しておるのですけれども、その売行きが展覧会の観覧者数に比べるとかなり多く、当館で作成したカタログも既に４１冊売れているという状況になっていて、そこは今回よかった点かなと考えております。

今後は、教育普及事業としまして、これは５ページになりますが、１２月に３校、小金井市立東小学校と前原小学校、第一小学校の３校の受入れを予定しております。

丸山晩霞展については以上です。

【鉄矢会長】　ありがとうございます。

何か質問や御意見等がありましたらお願いします。

【原田委員】　質問ですけど、図録の売上金がよいというのは、いつもの展覧会のときの入場者に対する割合が多いということですか。

【西尾学芸員】　今現在で開催日数が９日なんですが、９日で４１冊売れているということなので、単純計算すると、残りの日数で考えれば８０冊以上は売れるということになります。多分、コロナでお客様が伸び悩んでいたという部分もあるんですけれども、今後、購買意欲が上がっていくといいのかなと思っていて、そのきっかけになればいいかなと思っています。

【原田委員】　内容的に何か理由は考えられますか。

【西尾学芸員】　今回、山田写真製版所さんというところで印刷をお願いしまして、色校正が間に合わなかった部分があって、実際の作品と見比べると色が見劣りする部分というのもあるんですけれども、かなり細かい部分まで印刷に取り組んでくださっているので、そういう意味では、図版としては精巧なのものができているかなと思います。

【原田委員】　ありがとうございました。

【山村委員】　これは１冊幾らなんですか。

【西尾学芸員】　１冊１，２００円です。

【山村委員】　１，２００円。

【西尾学芸員】　はい。

【山村委員】　何冊刷っているんですか。

【西尾学芸員】　４００です。

【山村委員】　４００。

【西尾学芸員】　はい。

【山村委員】　　予定では３００ぐらいは寄贈のもので、１００冊ぐらいは販売分と。

【西尾学芸員】　　３００も寄贈はしませんが、単価を考えると、ちょっと多く刷らざるを得なかったという現状もありました。なので、ちょっと残ってしまう部分というのはあると思いますが、それは今後ネット上で販売していくという形になります。

【山村委員】　　予定ではどれぐらいの割合なんですか。予定ではどれぐらい寄贈、どれぐらい販売。

【西尾学芸員】　　寄贈で、恐らく５０冊いかないかなと思います。なので、３５０部を販売部数として、今回１００部売れましたら、残りが２５０部。１５０部になったのを今後売っていくという形になっていきます。

【山村委員】　　分かりました。

【鉄矢会長】　　タイトルで「日本と水彩画」とあると、関連企画のワークショップで水彩画を学ぼうなんてあると、すごくうれしい企画だなって自然に思ったんですけれども。

【西尾学芸員】　　実は、水彩画の方にもお声がけはしていましたが、そもそも小山敬三展のときに水彩画のワークショップのイベントを考えていて、以前、アニメーションの背景を描くという水彩画のイベントをしたかと思うんですが、その方に依頼をしたら、今年度は忙しいということでかなわなかったという経緯があって、今回、水彩画のイベントは断念しました。

【鉄矢会長】　　ありがとうございます。

【山村委員】　　いいですか。丸山晩霞記念館、東御町だっけ。

【西尾学芸員】　　東御市ですね。

【山村委員】　　のほうでは、これは売ってくれないんですかね。

【西尾学芸員】　　今のところそういう話にはなっていないんですけれども、もし先方からそういった御希望があったらお送りする……。

【山村委員】　　それはそうだよね。

【鉄矢会長】　　ありがとうございます。

　では、よろしいでしょうか。

　では、次に、これまで開催した展覧会について、事務局、説明をお願いします。

【中村学芸員】　　では、１ページ目に戻りまして、実施した展覧会、教育普及事業の報告について、これは開催順に報告させていただきますので、最初は、小山敬三展から報告させていただきます。

小山敬三展は、これは前回の運協を開催したときにちょうど始まったばかりでしたけれども９月４日まで、開館日数としては２８日間で開催いたしました。

今ちょうど第８波がもう来ているということですが、コロナの第７波と、７月の辺り、かなり暑い日がありまして、そういう意味では出足人がかなり鈍かったんですけれども、その影響が最後のところまで尾を引いた形になりました。入館者数としては７８４人です。やはり１，０００人に届かない形になりました。

ただ、開館日数２８日で７８４人、計算したら２８掛ける２８でちょうど７８４になるんです。ということで、１日当たり２８人来ている。小山敬三のことが好きだとか、はけの森美術館のことが気になっている、比較的熱心な方々が来てくれたようです。

アンケートの報告、資料３に小山敬三展と、この後報告させていただく志村信裕展のアンケートがついております。こちらの小山敬三展のアンケートの集計結果を見ましても、今回が初めてという人から、１０回以上来たことがあるという人まで、結構満遍なくアンケートが返ってきている状態です。自由記入欄を見ていても、熱心にいろいろ意見をくださっている方が多い印象です。ちょっと寒いとか、道が分かりにくいとかというような指摘もあるんですけれども、ネガティブな意見もただ漠然と気に入らないとかそういうことではなくて、ここをこうしてほしいという具体的な要望になっている。小山敬三展に来た人は比較的ここの美術館に対して強い興味を持ってわざわざ来てくれたのかなという感じがいたします。

関連企画に関しましては、前回の運協のすぐ後、に行われたアニメーション制作ワークショップ「はけの森の生きものたちをつくろう」と、それから、ギャラリートークが行われまして、この「はけの森の生きものたちをつくろう」の関連企画のほうは後ほど改めて報告させていただきますので、一旦、ギャラリートークに進めさせていただきます。

ギャラリートークは、７月３０日と９月３日で、それぞれ８人と１３人という形で参加していただきました。最初に申しましたように、コロナの第７波の中で出足が鈍かったという中でも８人、１３人という形で、１０人程度参加者がいたという意味で言えば、やはりこの辺りも熱心な方が来てくださったのではないかと思います。

鑑賞教室、教育普及事業に関しましては、９月２日に第三小学校、これは前回の運協のときに第三小学校は非常事態宣言とかそういうのに引っかかったりして去年開催できなかったとか、そういうようなことがいろいろあったということも申し上げました。今年は無事に開催できまして、児童が計１５７人、引率者が９人の計４クラスで来ていただいてい

ます。

ということで、アニメーション制作のワークショップの詳細に関しましては、西尾から報告させていただきます。

【西尾学芸員】　　学芸員の西尾です。

この間の運営協議会の本当にすぐ後だったんですけれども、８月６日の土曜日に、１日は３回に分けてワークショップを行いました。こちらのワークショップでは、まずこの多目的室を使用しまして、子供たちにはけを使って人形を作ってもらいまして、その後、はけの手アニメーションさんの皆さんが当館のこちらのラウンジを使って、そこに簡易的なスタジオを造ってくださいまして、そこで撮影を行いました。

さらに、子供たちの音声、声を録音しまして、そのイベントの後にはけの手アニメーションさんのほうでその人形を動かした動画と音声をフィックスしていただいて、動画をこのように作成していただきました。

これがスタジオで撮っている様子です。

それを小金井市の公式ユーチューブチャンネルのほうで、このように許可を得て公開に至ったという経緯があります。公開自体は９月末頃だったか、１０月上旬だったかと思うんですけれども、無事公開することができました。

ちょっと音も出してみます。

（動画上映）

今回、依頼していなかったんですけど、音楽もこのようにつけていただいて。

お子さん、参加した皆さんもとても満足度が高いイベントだったようで、今回、アンケートの返答がないんですけれども、アンケートも全て、大変満足だったというような御意見をいただきました。

このように、かなり作家さんが手を加えていらっしゃる部分もあるんですけれども、お子さんが自分でつくったものというのがこれだけ動いて、動いたり、自分の声が乗っかったりする喜びというのも味わってもらえる、アニメーションの仕組みを知る意味でもいいイベントになったかなと思っているので、今後も連携を行いつつ、こういったワークショップは第２弾、第３弾と重ねてクオリティーを上げていけたらなと考えています。

よろしいでしょうか。以上です。

【鉄矢会長】　　ありがとうございました。

一旦ここで切るんですか。次の？

【河上学芸員】　　では、続きまして、学芸員の河上です。

続きまして、小山展の後、１０月１日から３０日まで行われました「花侵庵と現代作家：Ｎｏ．１　志村信裕」展に関しまして御報告いたします。

こちらの展覧会に関しましては、資料の２ページに記載されていますとおり、来館者数が合計１，０００人を超えまして１，０７７人で、こちらの数字に関しては、実際、鑑賞教室が４校入ったというところで４桁に達したとはいえ、鑑賞教室がなしの場合でも６４４名の来館がございまして、開館日数で単純計算で割りますと、鑑賞教室なしでも平均２６．８人の来館があったという結果になりました。鑑賞教室ありで単純に２４で割りますと、１日４４．８人が入ったというような結果になっています。

今回、実は小山展に引き続きアンケート調査を行ったんですけれども、アンケート用紙、２枚目にありますが、来館者数が１，０００人だったんですけれども、回答枚数が非常に少なく、５枚しか返ってこなかったというところがございまして、これに関しましては、今回の展覧会では、配付資料、お客様にお渡しする資料が作品解説や案内図などを含めて２枚あったので、手元にたくさんの資料がある状態で、アンケートを書くというところに向かなかったのが一つ理由として考えられるかなと思っております。

こうした結果を受けて、実は現在開催中の晩霞展に関しましてはアンケートの御協力を受付の窓口で直接、お時間があればお願いしますとお願いする対応をさせてもらっていて、実際、アンケートが本当にたくさん返ってきている状況です。

志村展は回答枚数が５件なんですけれども、その中身についてこちらの資料に書かせていただきました。非常に興味深かったのが、志村展が現代美術ということで、現代美術がお好きな方や興味がある方が多くいらっしゃるというような想定をしていたんですけれども、実際には市内に住まわれている、もしくは近隣に住んでいる、はけの森美術館に来たことがある方が多かったです。アンケートが５件なので、そこだけで一くくりにはできないんですけれども、このアンケートを見る限りでは市内の方も来てくださっていたというような印象もあります。

また、アンケートの一番最後のページに意見や感想がありました。非常にポジティブな御意見や感想をいただきました。映像を見ている間、寒くなってしまったという御意見なんかももちろん、ありました。直接お客様と話す機会が多い展示だったので実は口頭でもご意見をいただいているんですけれども――というのも、お茶室で展覧会をして、担当学芸員の私もちょこちょこ会場のほうに行ったり来たりしておりましたので、来館されてい

るお客様とお話しする機会がかなり多かったんですが、皆さん、面白い企画だねというふうにおっしゃってくれた印象があります。

こちらに関して、今回お手元にある図録、会期中には残念ながら販売がかなわず――というのも、展示風景を含む図録を作成するということで、会期終了後にできました。

皆さんにお配りしているのはサンプルなのですけれども、販売はこれからと予定していて、会期中は予約販売を受け付けて対応いたしました。予約販売なので、やはり数としては伸びなかったんですけれども、１８件、予約販売を受け付けて、これから販売と同時に発送をお客様のほうにはする予定です。こちらは８３０円で販売です。

こちらの展覧会の関連企画としましては、２つイベントを行いました。

１つは、作家の志村信裕さんと、もう一人、ニットディレクター、これはどういったお仕事かというと、ニットをデザインしたり、ニット販売の企画をするような、そういったお仕事をされている、渋谷渉さんのお二方をお招きし、トークイベントを開催しました。すみません、展覧会の内容をお伝えしていませんでした。こちらの展覧会が２会場で行われました。１つがお茶室~~を~~、こちらが主会場で、そちらに２つの作品を展示し、もう一つの会場である当館２階ラウンジでは志村さんの代表作、羊にまつわる映像作品を展示いたしました。

その羊作品に関連して、さきほど申し上げたトークイベント「未来の暮らしとセーター」という対談を行いまして、こちらが事前申込制で定員が２０名程度だったんですが実際は参加者が２１名で、半数以上が市内、近隣にお住まいの方が参加してくださいました。

２つ目、志村信裕ワークショップ、これはどちらかというとお子様向けといいますか、学生の皆さん、小学校の高学年から中学生を対象にした、志村さんによる創作ワークショップを行いました。

具体的に内容を申し上げますと、お手元の資料１ページ目が先ほど申し上げたトークイベントの様子を写した写真が２点と、その裏側、上下が逆になっておりますが、子供を対象にしたワークショップの様子を写した写真がございます。ワークショップは会場を美術の森緑地に移しまして、こちらで鏡に絵を描く、鏡に映り込んだ景色をトレースするという、「写すこと」そして「描くこと」をというようなテーマで志村さんによるワークショップを行いました。

先に、黒いペンで、外で好きな風景や好きな場面を参加者の皆さんにトレースしていただいて、その後――この時期、まだ蚊がとても多くて、３０分もいると蚊に刺されて大変

な時期だったので、３０分、３０分で１時間なんですけれども、後半の３０分は多目的室に戻ってきて、そこからはお子さんたちの想像力に任せてその風景を色づけして一つの作品を完成させて持って帰っていただくという、そういったワークショップを行いました。

こちらも参加者が１１人と９人ということで、ほぼ定員の人数が集まりました。アンケートのほうも、皆さんより大変満足という返答をいただきまして、すごく好評だったのと、あとは、志村さん自身も初めての試みだったそうなんですが、最初は難しいと参加者のお子さんたちが言っていたんですが時間がたつにつれてどんどん描きたいというような雰囲気になりました。蚊に刺されながらも外にいたいというお子さんもいました。とてもよいワークショップになったんじゃないかなと思っています。

３番の緑地トークは、こちらも展覧会の主会場が茶室というところで、ギャラリートークならぬ緑地トークと題し~~い~~、場所を替えて学芸員が作品解説を３０分程度行いました。こちらも参加者が１０名ほど集まって、質問もたくさんあって、和気あいあいと作品について皆さんとお話ができました。

（２）の教育普及事業は、先ほど申し上げましたとおり４校、市内の小学校４年生が来館しまして、茶室と２階ラウンジの映像の作品、さらに中村研一の作品を３か所、入替え制で見るという形で行われました。各学校の先生がたと事前にどういう動きですすめるかという相談をさせていただきました。ここはやはり中村研一の美術館であるというところもみていただきたい、というのを学芸員の意見も先方にお伝えして、中村研一のお部屋も重点的に見ていただき、さらに外の茶室を見ていただきというような形です。

映像の作品に関しては４５分ありましたので全部見ていただくことはかなわなかったんですけれども、もっと見たい！という声が多かったです。また来てねというところで皆さんと――映像の作品というのを初めて、映画とも違った印象を４年生のお子さんたちは感じたようで、面白かったと言ってくださっていました。

志村信裕展については以上です。

【鉄矢会長】　ありがとうございます。

以上で、展覧会の説明は終わりでいいんですよね。

【事務局】　あと、展覧会とは別立ての教育普及事業が１件。

【鉄矢会長】　じゃ、教育普及事業、それもお願いします。

【河上学芸員】　２番の展覧会とは別立ての教育普及事業というところで、先ほどお配りした写真の資料になるんですけれども、写真の２枚目で、志村信裕展の同時開催、１０

月１６日日曜日に行われました「ダンス保育園！！＠くじら山」というダンスの親子向けのワークショップを、小金井市芸術文化振興計画と当館とのコラボレーション企画として開催いたしました。

こちらは、会場が、タイトルにあるとおり都立武蔵野公園すぐ、美術館から歩いて１０分かからないぐらいの都立武蔵野公園の中にあるくじら山と呼ばれる小さな小山です。地元の子どもたちにはよく知られている遊び場なんですが、そちらを会場にこちらのイベントを行いました。その様子がこちらの写真の資料のほうに載っております。

こちらは小金井市芸術文化振興計画という市の事業なんですけれども、こちらの事業を委託しているＮＰＯ法人アートフルアクションさんとはけの森美術館との共同企画として開催したイベントです。野外のイベントだったんですけれども、このダンス保育園というプロジェクトがもともと各地で行われている親子向けのダンスのプロジェクトで、そのプロジェクトのチームの皆様を招聘する形で開催しました。

当日は晴天だったので、くじら山のほうでイベントが行われまして、参加者も合計７７名と書いてありますけれども、その場にいた、たまたま公園に来ていたお子さんなんかも含めますと、恐らく８０名以上の大所帯が楽しくワークショップを行うというような内容になりました。

ワークショップだけではなくて、後半に講師のダンサー篠崎芽美さん――ダンサーはお一人ではなくて篠崎さんを含め実は５名いたんですが、その５名のダンサーの方と生演奏、音楽家の国広和毅さんの音楽とで、パフォーマンス鑑賞の時間も最後にありました。ワークショップとパフォーマンスが合体したような、非常に充実したイベントが行われました。

こちらのイベントのアンケートも、アートフルさんのほうでまとめていただいた結果、非常に好評で、皆様満足されて、またくじら山で何かないんですかというようなお声もいただいているそうです。

以上です。

【鉄矢会長】　ありがとうございました。

何か質問、御意見等ありましたらお願いいたします。

【原田委員】　最後の事業ですが、これは、はけの森美術館としての役割はどんなことなんでしょうか。

【河上学芸員】　これは、まず、親子向けのイベント、小さなお子さん向けのイベントを文化振興計画のほうで一つ立てたいと、企画をしたいというところでお話をいただいて、

美術館のほうでアイデアを出す、アイデア出しのところから関わらせていただきました。

また、会場を野外でやりましょうという話にはなったんですが、雨天の可能性ももちろんありますので、雨天時に会場をどこにするかというところで美術館の１階の展示室は使う予定がなかったので、そちらを雨天時の会場として設けるというようなところで美術館として協力、関わらせていただいたというところです。

【原田委員】　分かりました。

【鉄矢会長】　これ、前回予定していたんでしたっけ。

【河上学芸員】　はい。

【鉄矢会長】　報告、書いてあったんだっけ。

【河上学芸員】　多分、後で御説明しますというところで、最後に切れちゃったんだと思います。ダンス保育園のところで言及はあったんですけれども。

【鉄矢会長】　議事録に入っていましたっけ。

【河上学芸員】　はい、入っています。説明がなく終了してしまったような記憶があります。

【事務局】　多分、前回８時半回ってしまったので、最後のところ、ぶっつり切ってしまったのかなと。

【鉄矢会長】　申し訳ない。司会のほうですね。

【山村委員】　質問と感想で、まず、いいですか。「はけの森の生きものたちをつくろう」のアニメーションは大変面白く、感想です。いいアニメーションだなと思います。
それから、志村さんのほうは、入場だけでも１日１８人だから立派なものだと思います。
映像は４５分と長かったんですけれども、あれは見ていらっしゃいましたか。

【河上学芸員】　これは私も心配をしていたんですけれども、３０分以上出てこない方が多かった印象です。見始めたら見続けてしまうという内容だったのでは。見やすいという言い方をすると語弊があるんですけれども、滞在時間が非常に長かった印象です。通常、この規模の展示で、例えば平面で壁にかかっているような作品をゆっくり見たとしても、多分、30 分はかからないかと思います。

【河合学芸顧問】　失礼、河合です。花侵庵のほうメインではあるんですけれども、展示、大きく言えば２つの映像作品で、それをかなりじっくり見ていっても時間的にはそう拘束される時間は多くない。それに対してなので、美術館２階ラウンジでの４５分というのが、ちょうど一つの志村ワールドを形成するのにぴったりの時間だったのかなという気

もしたんです。

実際、私自身も庭園美術館なんかで志村さんの羊は見ているんですけれども、確かにグループ展なんかで４５分じっくり見るというのは、これは至難の業になっちゃうんですが、これを目指して来た人がどうも結構いるなと。逆に、志村さんを知っている人たちが来たり。

それで、私自身も今一回じっくり見てみようというので、一回り半ぐらい見ていって、そうしたら、始まるときから一回りの人がかなり多くいらっしゃいました。それは本当にこういう形だからできたんだなというのは感じました。ただ感想だけで申し訳ないんですけれども。

【山村委員】　私も見に来て、自分も庭園美術館と、あと、どこかでもう一回見たような気がするんですよね。

【河上学芸員】　千葉です。

【山村委員】　それでも３０分ぐらい見ました。やっぱり、なかなかいい映像で、すごくきれいだね。画面自体が非常にきれいです。

【河合学芸顧問】　きれいですね。

【山村委員】　よかったなと思います。

それから、質問のほうなんですけど、図録が後でできたということで、十何件予約販売ということなんですけど、これは何冊作って、さっきと同じ質問なんですが、何冊が販売分で、何冊が寄贈分なんでしょうか。

【河上学芸員】　まず４００部、今回は作っていて、晩霞展と同じ部数、作っています。寄贈に関しましても、おおむね同じ寄贈先になりますので、５０件ぐらいと考えます。

【河上学芸員】　販売に関しても、実は志村さんのほうから、今後の志村さんの関わる展覧会や個展なんかでも、ぜひ図録をここで、この図録を販売したいというようなお話はあるんですけれども、販売の仕方について、あまりそういう例がこれまでになかったもので、これからそれはどうするのが一番いいのかというのを考えていくような、そういう段階に、今、あります。

【山村委員】　さっきの、丸山晩霞のほうもそうだけど、やっぱり売り切らないとと思うので、何かその販売方法とか、活用の仕方、在庫ってほんとに大変なので、検討してください。

【西尾学芸員】　志村展の図録につきましては、今回、花侵庵の名前の由来となった詩

について再録をしているページ等ありまして、その和訳等も河上のほうで尽力して今回載せているという意味で、つまり、花侵庵を含む庭についての図録でもあるので、今後、所蔵作品展等のときにも並べて販売をしていったらいいのではないかなということも検討はしているというところです。

【山村委員】　ありがとうございます。

【鉄矢会長】　よろしいですか。

【山村委員】　はい、ありがとうございます。

【原田委員】　花侵庵、志村さんの展覧会、とても楽しく拝見しました。私は現代作家の展覧会はそんなに見たことないんです。行っても、何だかよく分からないで終わっていたんですが、なぜか心にしみましたね。あの映像も、それから、茶室も。

茶室をあんなふうにしてのぞき込んでこうやって見るということはあまりないんだけど、何か両方とも不思議な、何で不思議なのかなと思ったら、例えばチョロチョロ水の流れの音を聞きながら見ているとか、それから、一緒に、後ろにいた小学生が、小学生だから感じたまましゃべっているんですよね。あ、何とかだとかね。それも一緒になって鑑賞しているみたいな感じで、不思議な体験だったなと思いました。

それから、映像のほうは、４５分のビデオって、何だ、映画じゃないかと思って見始めたんだけど、どうも見ているうちに、映画でもないし、ドキュメンタリーでもないし、志村さんの作品なんだろうなと。見ていて違うんですよね。映画のようなドラマがあるわけではないし、ドキュメンタリーのように何か説明したり教えたりすることでもないし、でも、やっぱり見ちゃうんですよね。

それで、市内に知り合いの９０歳の女性がいるんですが、彼女に現代美術って興味あるかと聞いたら、いや、そんなの全然ないわよと言うんだけど、面白いから見てきてよと言って勧めたんですね。で、見てきた後に、あれ、どうでしたと言ったら、面白かった、羊、羊がいっぱい出てきてって。あれ、いっぱい出ていないんですよと言ったんだけど。教えてもらっていたのでね、僅か５分しか出ていない。え、だって羊きれいだったわよと。全部見たわよと言うのね。

それから、茶室のほうも、茶室というのはお茶会をやるところだと思ったら、あんな使い方があるんだねと。９０歳の女性がびっくりしていました。

市内のお客さんが多かったとおっしゃいました。だから、市内のそういう今までこういういい作品に触れていない人も見て、びっくりしたり、面白かったりしていたのかなと思

って、うれしかったですね、勧めた身として。

以上です。

【河上学芸員】　　ありがとうございます。

【鉄矢会長】　　ありがとうございます。

そのほか、ございませんでしょうか。

【原田委員】　　ごめんなさい、もう一つ。アンケートの話があったんです。あれは会場が２階と外でしょう。で、アンケートの箱が置いてあるところが全然関係ないところで、あれだと気がつかないで帰っちゃうんですね。ですから、置く場所、それから、さっきの受付で声をかけるというのはやっぱりいいですね。気がつけばみんな書いてくれるんだと思いますけどね。

【河上学芸員】　　今後は、配付資料があまりにも多くならないのであれば、ぜひ、もうチケットと一緒にお渡しするような形を取っていくのもいいんじゃないかと考えています。ありがとうございます。

【鉄矢会長】　　私からは、やった作品が大変受けたというのはとてもよかったと思います。多くの人から評価を得たのはいいなと思っています。

そういうことを踏まえながらも、前回出た、どうして現代アートのこれがここにあるのかというものの回答が河上さんのリーフレットの中に書いた文章だと思うので、これをぜひ委員の皆さんによく読んでいただいて、次の第２弾がどういう理由で、この理由の中のものがちゃんとそれを、パート２ができる、つながっていく話なのかを意識しておいていただきたいなというのは思います。何でもできちゃうだとパート２じゃないような気がするし、その辺はぜひ見守っていきたいと思いますので、ぜひ皆さんもよくお読みください。

【山村委員】　　それに関連して、図録はざっとしかまだ見ていないけど、一応、花侵庵と中村研一が１で、花侵庵と志村信裕が２で、花侵庵中心で書いてくれているからいいなと思っています。

また、お茶室のパンフにも使いたいということなので、ぜひそこは学芸員としてやってくれると、ここでやった意味というのがすごく出てきますので、いいなと思います。

そういう意味で、先ほど、「はけの森の生きもの」というアニメーションが非常にいいと言った理由の一つがそれで、はけの森に子供たちが行って、そこの体験を引っ張ってきてアニメーションをつくって、一個の作品になる。つまり、自分の経験したことが、ここで経験したことが、自然とか動植物とか、自分の体全体で経験したことがああいうふうに

アニメーションとして作品になるという、それがすごく大事な部分だと思うので、今ここ小金井にいることというか、子供たちがそこに、自分の経験していることというのは、お仕着せじゃなくて、自分がつくっているんだという感じになるので、それは地域美術館のすごく重要な役割じゃないかと思います。

できれば、だから、志村さんの場合ももうちょっと、もちろん、花侵庵でああいう近所の場所だとか、見せ場だったりとかあると思うんだけれども、もうちょっと関わりを深くしてもらえると、もっといい展覧会になったんじゃないかなという気がします。

【鉄矢会長】　ありがとうございます。

あと、私の記憶が正しければ、はけの森美術館になる前、中村研一記念美術館からこっちになる前の在り方の冊子か何かに、多分、この美術館は地域でくじら山とかそっちも活用したほうがいいねというような話はずっと出ていたような気がするんです。なので、そこと比べると、この活動、今回のダンス甲子園じゃなくて。

【河上学芸員】　保育園。

【鉄矢会長】　ダンス保育園は、こういうふうに位置づくというのは書けるんじゃないかなと思って、すいません、不確かなんだけど、２冊あった在り方のほうのどっちかにそんな展開があったような気がします。

【中村学芸員】　恐らく、緑色の冊子のほうですね。確かにその指摘があったかと思います。

ただ、その頃から地域の施設を活用するという捉え方が変わってきているところはありまして、あの段階では実は、花侵庵は古くて邪魔なものという扱いで言及されているんです。そういうふうに、くじら山であるとか野川公園とかというところで地域と連携していくのであれば、あれは正直邪魔になるから取り壊したほうがいいという、そういう意見が出ていたりもしている。そういう意味では大分捉え方が変わってきて、花侵庵もやっぱり大事な地域の一つの財産だねと変わってきたというところはあると思います。その中で、当館の立ち位置というところで、あれは大事なものだよと言ってきたこともあると思います。

【鉄矢会長】　あともう一つ。はけの手アニメーションさんたちも、グループではけの手さんなんですけど、個人名をもらったほうが、このグループ何人と言われたときに個人名が出ていたほうが、あの作家さんが描いているんだというのが応援になるので。

【西尾学芸員】　今回、５人のうち４のみの参加になったので、名前を出すということ

をためらってしまった部分があって。今後ははけの手さんと一緒にやるときにはそういうお話などもしつつ、個々の活動も御紹介できたらいいかなと、今、聞いて思いました。

【鉄矢会長】　　たまたまうちの特任教員が、博多先生が入っているので、博多先生側からすると、我々がそういう特任教員を育てる側だというのと、それと、はけの森美術館でといったときに立証する、名前が入っているほうがずっとその先生の活躍になるので。

【西尾学芸員】　　ありがとうございます。

【鉄矢会長】　　ありがとうございます。

そのほかございますでしょうか。

では、３番目の意見交換等になります。意見交換等ございましたらお願いします。

こんにちは。

【坂井委員】　　よろしくお願いします。

【鉄矢会長】　　意見交換になりました。ざくっと、定例会らしく、今やっている展覧会、それから、今までやってきたことを解説いただいて、質疑が終わって、今ちょうど意見交換になりましたけど、少し戻って、もし今まで見ていた展覧会、これがよかったとか、褒め忘れがあったらちゃんとコメントしていただきたいと思います。

【坂井委員】　　褒め忘れはないです。私は丸山晩霞展、拝見していないので。

映像は楽しく拝見しました。面白かったです。

何か、全然勘違いなんですけど、議事録に全然関係なくて全然勘違いなんですけど、つくばいでポツポツって音がしたんですね、後ろで。つくばいって分かりますか。

【鉄矢会長】　　はい。

【坂井委員】　　私、それを知らなくて、金魚に音声も入っているんだと思って。あ、音声すてきじゃない、この金魚にポツポツという音がこうやって入るんだ。あれ？　でもと思って後ろを見て、つくばいだったので、あ、そうか。でも、思わず、いい感じだったと思いました。

【原田委員】　　面白いですね。私も全く同じ。最初、金魚だからね、音つけているのかと。

【坂井委員】　　しましたよね。

【原田委員】　　うん。だけど、後ろに振り向いたら……。

【坂井委員】　　そうなんですよ。

【原田委員】　　湧き水があってね。

【河上学芸員】　　作家さんの狙いどおり。

【原田委員】　　狙いどおりなんですね。

【坂井委員】　　そうなんですか。

【河上学芸員】　　あそこは無音の映像しか僕は考えられないとおっしゃっていて。鳥が囀って、水の音も聞こえる中で、映像から音は絶対出せないとおっしゃって、金魚の位置を決めているときに、もうこれ、ここしかないと言っていました。

【坂井委員】　　面白い体験をしました。

【河上学芸員】　　ありがとうございます。

【鉄矢会長】　　サウンドスケールとマッチした感じですね。

【山村委員】　　蚊にかまれました？

【坂井委員】　　もちろんです。

【河上学芸員】　　ヤブカに、そうですね。

【坂井委員】　　係の方が蚊除けを用意してくださっていたので。

【河上学芸員】　　蚊除けを８本用意して、全部使い切りました。

【原田委員】　　あと、金魚のところ、非常に不安定に動くんだけれども、蛇口は最初から狙っていたんですか。あそこに蛇口が、金魚が来ると、蛇口のところに来ると本当に金色に光って、ちょっと太って見えるんですね。あれはうまいなと思って。別にあそこの場所のためにつくった映像じゃないんでしょう。

【河上学芸員】　　そうですね。でも、あの金魚の映像の作品は、これまでも色々なところで実は展示をしているんですけど、志村さん御本人も、今回の展示はとびきりよかったと。金魚ぴたっとはまった空間だったと。

【原田委員】　　あそこのためにつくったみたいな。

【河上学芸員】　　そうですよね。

【坂井委員】　　いや、ほんとにそう思いました。すばらしい。

【河上学芸員】　　だから、鑑賞教室のお子さんでも、本物かと思ったと。本物の金魚が、いるわけないじゃないですか、あんなに大きいし。でも、本物だと思ってびっくりしていて、かわいかったです。本当にあそこに住み着いて、この緑地の中でうろうろしている、この辺りにまだいそうな雰囲気、そんな作品になったと。ありがとうございます。

【坂井委員】　　ありがとうございます。

【鉄矢会長】　　そのほかございますか。

なければ、４番のその他です。その他ございましたらお願いします。

【山村委員】　今年度の展覧会はもうこれで、丸山晩霞で……。

【事務局】　今年度については丸山晩霞が終わった後は、３月下旬ぐらいにまた入るんですけれども、それまでは休館になります。

【坂井委員】　本当は４のところで質問すればよかったんですけれども、申し訳ないです。ちょっと戻っていただいて。前もちょっと課題というか、話題になりました例の先生の映像がボリューム１だったら、その先のという、２とか３の案とかは出てきているんですか。

【河上学芸員】　まだ案として具体的には出ていないんですけれども、頭の中には、学芸員の中では何かこういう出し方だったらできるかなとかというのは何となく。

【坂井委員】　まだ検討状態？

【河上学芸員】　はい。いろんなアプローチの仕方があると思っているんですけれども、この志村展をやったことをきっかけに、かなり花侵庵のことを調べたりすることができて、やはりほかと違う特性みたいなものも発見することができたので、そういったところと合うような作品を今後リサーチをしつつ、また頭の中で整理しながら次につなげられたらと思っています。

【坂井委員】　気持ち的には年度一本とか、そんな気はしていらっしゃる？　それは無理なんですか。

【西尾学芸員】　予算がやはり、新しい作品を例えばつくっていただくとかになってくると、かなりの予算が必要になってくるので、やはりそれを考えると……。

【坂井委員】　軽々に言ってしまって申し訳ありません。

【西尾学芸員】　かなり念入りに時間をかけて、ほかの展覧会との兼ね合いも考えながらやっていかなければいかないので。なので、どういう作家を選ぶかというところについてはかなり慎重にやっていくというところはあるかなと思います。

【坂井委員】　分かりました。何かそれもすごく理解はできるところで、せっかく１をやったので、そんなに迷子になるほど熱心に注視している人もいないかもしれませんけど。２とかって、え、何で２だったんだっけみたいにならないうちにやったほうがいい。

【河上学芸員】　間が空き過ぎてしまってということで。

【坂井委員】　そうです。あったほうがいいかなというふうに。

【河上学芸員】　そういうふうな事態にはならないように、定期的に開催する、うまく

定着するような仕組みを。

【坂井委員】　何となくね、そうですよね、いいですよね。

【事務局】　はい。仕組みというか、そういうペースでやれたらとは考えているところです。

【坂井委員】　失礼しました。すみません、会長、途中で。

【鉄矢会長】　大丈夫です。

ほかに何かありましたらと思いますけど。

【山村委員】　ちょっと雑談で、今回、こういうふうに現代作家と、それから、茶室、はけの森の自然というか、そういうものが、例えばワークショップがあったりとか、アニメーションがあったりとか、映像があったりとか、従来は、だから、丸山晩霞もそうですけれども、ここの中村研一の美術館ということで油絵だとか水彩だとかということが中心だったんですけど、幅が広がっていいなと思う反面、限られた人員と限られた予算なので、どこかでその辺を生かす計画というか、バランスというのか、そんなことも考えなきゃいけないんだろうなとかと思うんですけど、何かそういう考えはありますか。

例えば、今回、アニメーションもすごく面白かったから、映像ワークショップをやってもいいなとかというふうに漠然と思うんですけど、そんなような先々の予定というか、学芸員３人で話すということはありますか。

【河上学芸員】　かなり話している。

【事務局】　そうですね、そこは。

【河上学芸員】　はい。

【事務局】　ただ、実は来年度に関しては、これはもう巡回展で、現代美術の展示が一つ内定している状態ですので、そこで言うとちょっと……。

【中村学芸員】　来年度に関してはそういう意味で言うと、近現代と現代に関わる展示というのが、恐らくこのままいけば一つ、この年度の中での重点を置いたところになってくるというのはあるかと思います。

ただ、そこで一気にもう現代一辺倒になってしまうとなると、それはそれでやはり当館のバランスとしてはおかしくなってきてしまうところがありますし、そこで言うと、一足飛びに何でもやっていこうとすると、この少ない人員と限られた予算というところで、やっぱりどこかで無理が出てくると思いますので、常にそこは一つずつ段階としてこなしていって、やってみてどうだったかというところの振り返りが一つ重要かなと感じていると

ころです。

【山村委員】　　全くおっしゃるとおりだと思います。

【中村学芸員】　　やってみないとやっぱり分からないことがすごくこの館は多いですし、そこで言うと、最初の計画を絶対に間違えないように執行するというよりかは、とにかく一回、やれる形でやってみて、やってみた後で今回の改善点は何だったか、次にやるとしたらこの辺りをどう変えていけるかというやり方が、恐らくこの館にとってはよりいい形なのかなと個人的には感じているところです。

【山村委員】　　同じことを言っているのもかもしれないけど、先ほど鉄矢委員がおっしゃったように、はけの手アニメーションで小金井か、あるいはこの近隣のアニメーターの作家の人をどんどん御紹介していって、むしろここからアーティストが育つような、それを美術館が応援するような動きとか、地域のいろんな人的資源を生かすような、何かそういうサイクルが、今おっしゃったようなバランスの中でできていくといいんじゃないかなというふうに思います。なかなか、限られた予算と限られた人員で難しいと思いますが、そういうことも意識しながら学芸員が企画を練っていくといいのではないかなというふうに思います。

【河合学芸顧問】　実際にはけの手のときなんかは私もずっと立ち会っていたんですけれども、本当に子どもにはびっくりする、声優になっちゃうんですよね。なり切っちゃう。それはびっくりしました。子どもにとってもそれは本当に貴重な体験だと思うんです。

はけの手で、意図的に彼らが野川のこととか何かのパンフを持ってきて、いろんな鳥がいるとかという自然のことをさりげなくそういう資料としてぽんと置いてくれて、子供たちもそれを見るという形。変に、何か授業をしていますよみたいな課外授業じゃなく、そういうことができていたと。

逆に、そこは勉強になるなと思ったし、私は、確か次の日に西尾さんにメールして、彼らを絶対に放すなと言ったんですけど。

本当に一つ一つ、例えば志村さんのやってくれた子供たちに対するプロジェクトも、水鏡ですよね。映るものって何って、子供たちにそれだけなんです。水だって。から来て、で、次に何。人工物、鏡だ。じゃ、その鏡が出てくるのにちゃんと結びつきますでしょ。花侵庵のほうに反射しているのが。それを……。

【山村委員】　　志村さんも逃がさないように今後も人的関係をつくって……。

【河合学芸顧問】　　その辺に理屈っぽくじゃなく、子供たちもさりげなく行っちゃう。

大人もそれに一緒について行って親子でやると。それはもう、後でレポートをきちんとまたつくるというのも一つかもと思います。展覧会とはまた別物ですけれども、そのときに、単に相手に任せてしまうだけではなく、こちら側もやはり、もっと、じゃ、こうしたらできるんじゃないかというのを提案。恐らく、みんなもそれぞれ思っていると思うんですけれども、今、展覧会だけでいっぱいいっぱいという感じは事実です。

【鉄矢会長】　展覧会、いっぱいいっぱいなはずなのに、面白いからというのと、この地域が持っている資源を活用できるからということで動いて、手が広がったんだと思うんです。すごくうれしいことなんですけれども、でも、楽しいことを増やしたら、残念なことに、どこかは切らないといけないというぐらいにやらないと、ただただ雪だるま式に増えていっちゃう怖さがあるので。

もう一つは、心を鬼にして人に任せる。これは学芸は関わっていませんというはけの森美術館の業務があるのかないのか。それとも、さっき言った頭出しのところだけはやったけど、後の運営は本当にお任せなんですよというふうに正直に言えるようにアウトソーシングしていいとか、心に決めていかないと、多分、時間的な拘束をどう下げるのかというところが僕は心配になっています。

【西尾学芸員】　実際、今年は、３本の企画展をやるということがありまして、それがうまく回るように、ワークショップはほかの展覧会の主担当とは別の人間がやったりとか、そういう組合せはしてはきたんですけれども、それでも手いっぱいになってしまった部分はあったので。

来年度以降はこういうふうにコンスタントに企画を毎年３本やるというのは、やはり実質的にこの体制ではなかなか厳しい部分というのは出てくるかと思うので、そういうバランスは見つつやっていこうという話はしています。

【河上学芸員】　３本やって分かったのは、最後はみんなが息切れしちゃう。それは来年に向けて、そこの反省といいますか、今回の結果を受けて、うまくお互い、全体で調整していけたらなと思っています。

【坂井委員】　もう既にお話が出ているかもしれないんですけれども、この関連の企画に関しまして、今までの関連の企画というのは、歌を歌っていただいたりとか、割と展示に関係がある――これは関係ないということは全然言うつもりはないのですが、すごく新味のある、ニットですとか、アニメですとか、新味のある企画は、これはどなたが考えて、皆さんが考えられたんですか。それとも持込み企画？

【河上学芸員】　　関連企画ですか。

【坂井委員】　　例えば、ニット。

【河上学芸員】　　ニットに関しては、これは志村さんが持ってきてくださって、志村さんがずっと対談をしたいと思っていたニットディレクターの方をお招きして、あそこで。ニットというのは羊毛を使ったニット。羊毛を使った……。

【坂井委員】　　羊毛のイラストありましたもんね、あそこ。

【河上学芸員】　　はい。なので、作品のことと関連したというところで、今回、この対談をすることにして。あとは、次のアニメーション、これは小山のほうですね。

【西尾学芸員】　　アニメーションについては、以前からはけの手アニメーションさんと一緒にイベントをしようという話はあったんです。ただ、それがいろいろな事情によって実現しないまま来てしまったのを、今回、限られた予算の中で御提案したら、快く引き受けてくださったので、ぜひ、この辺はアニメのスタジオも多いですし、そういうイベント、今までは背景を水彩画で描いてみようとかもあったので、それを発展させて、こういう手を動かして、ものを動かしてみるという経験を子供たちにしてほしいなと思ったので、お声をおかけしてという経緯があります。

【坂井委員】　　新しくて面白そうですね。それが多分、会長のおっしゃる、面白いけど、だんだん散漫になってきたねみたいな話になるので。

【鉄矢会長】　　いえいえ、散漫になっちゃうなんて私は言っていない。だんだん増えてくると、どうしたって人が足りない、マンパワーが足りないって、以前のように根性論で頑張れよというようなブラック企業になってほしくないので。

【河上学芸員】　　さっきのダンス保育園に関しては、これは美術館の事業ではないので、コラボレーションで、頭出しのところとか、運営なんかは市のコミュニティ文化課とこちらももちろん入っていたんですけれども、ただ、これはまたちょっと美術館の事業の話とは別です。この文化事業との関わり方というのは、その３者でやるバランスみたいなものが全然決まっていないで今後はそのバランスをどう配分を変えていくかというのは課題かなと感じています。

【鉄矢会長】　　よろしいですか。ほかに大丈夫ですか。

　では、以上ではけの森美術館運営協議会を終了します。お疲れさまでした。

――　了　――